

# 塩屋借景

塩屋百景事務局/シオヤプロジェクト

世界三大映画祭の一つ、イタリアのヴェネチア国際映画祭のコンペティション部門にて『スパイの妻』で監督賞に黒沢清監督が選ばれました。日本映画での受賞は、2003年の北野武監督の『座頭市』以来、17年ぶりだそうです。お話は、1940年代、太平洋戦争前夜の神戸が舞台。国家の重大機密を知った夫婦がたどる運命を描きます。私も観てきたのですが、緻密な展開で、翻弄されているのに心地よい不思議な感覚でした。日常に戦争が忍び寄ってくる怖さ、不気味さを感じられ、当時の街の様子なども伺い知ることができました。神戸では旧グッゲンハイム邸、旧加藤海運本社ビル、神戸市営地下鉄名谷車輛基地、神戸税関が撮影場所として使われています。旧グッゲンハイム邸は、蒼井優さん演じる主人公が高橋一生さん演じる夫と暮らす洋館として登場。人が暮らした息遣いのある洋館だと黒澤監督が雰囲気惚れ込み、使われることが決まったそうです。建物は明治大正期に神戸に滞在したドイツ系アメリカ人の貿易商、ジェイコブ・グッゲンハイム氏の名前に由来。旧グッゲンハイム邸と呼ばれて親しまれていましたが、この夏驚きのニュースがありました。なんと、所有していたのはグッゲンハイム氏ではなかったというのです！調べてみると、旧グッゲンハイム邸から北へ約20mにある洋館「旧竹内邸」がグッゲンハイム氏のもの、旧グッゲンハイム邸はイスタンブール出身のユダヤ人、ジェイコブ・ライオンズ氏のものだったそうです。今になって判明するのも、おもしろいですね。塩屋には最盛期で70戸の異人館があり、このうち現存しているのは6戸。神戸の異人館といえば北野が思い浮かびますが、風光明媚な塩屋にも広がっていたのです。今回の映画以外にも、旧グッゲンハイム邸では映画の撮影が行われていて、「繕い立つ人」「べっぴんさん」など、あたたかいシーンにぴったりな舞台として登場しています。『塩屋借景』は公募した100人に塩屋を撮ってもらう「塩屋百人百景」と塩屋の古い写真を集めた「塩屋百年百景」を経てつくられた本です。ちいさなまちですが、旧グッゲンハイム邸の管理人の森本アリさんをはじめ、住んでいる人が大切に、楽しくすごされてるんだなあ、と感じます。収録作品は塩屋在住ではない人も多く参加。アートの視点から街を見ることができ、お散歩がてら行ってみたいくなりますよ

## 黒沢清

1955年、兵庫県神戸市出身。立教大学在学中より8ミリ映画を撮り始め、『スウィートホーム』(88)で初めて一般商業映画を手がける。その後『CURE キュア』(97)で世界的な注目を集め、『回路』(00)では第54回カンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞。以降も『アカルイミライ』(02)は第56回カンヌ映画祭コンペティション部門に出品され、『トウキョウソナタ』(08)では第61回カンヌ国際映画祭ある視点部門審査員賞、『岸辺の旅』(14)では同部門監督賞を受賞。本作『スパイの妻』で第77回ヴェネチア国際映画祭銀獅子賞(監督賞)を受賞。

## 旧グッゲンハイム邸

明治大正期に神戸に滞在したドイツ系アメリカ人の貿易商の家族にその名を由来。コロニアル・スタイルの洋館は1912年にイギリス人建築家アレクサンダー・ネルソン・ハンセルの設計で建てられたと考えられ、グッゲンハイム家はこの地を“Pines Shioya”と呼び、1909年に移り住んで以降、1915年までの6年あまりの間この地に暮らしていたようです。